

「ウリマル」を思い出すこと：  
母語はどこにあるのか？

藤 卷 光 浩

“Remembering *Urimaru*, or a Mother Tongue :  
Where Can It Be Located?”

Mitsuhiro FUJIMAKI

Abstract

This paper attempts to problematize the notion of a mother tongue. As an exemplar study, it will refer to a novel, *Yu-hi*, of which theme is about the recuperation of a “mother tongue” for “*zainichi*,” Korean Japanese. This paper argues that the way their mother tongue is remembered as their memory in that novel induces strong sentiment for their “mother tongue(*urimaru*)” not only by a protagonist but also by its readers. Throughout this criticism, the mother tongue is shown to have worked through an uneasy syncretism, carrying within it an inner dissonance that marks a resistance to the liberal culture within itself. This paper particularly addresses that a mother tongue has been less fixed and stable than uncertain, fissured with that inner dissonance and an attachment to a mother tongue, *urimaru*, and that this *urimaru* opens up a possibility of its survival in the liberal culture.

失われた母語を求めてやまないのが現代社会だ。田中克彦によれば、母語とは「まるで母の乳から吸い取ったような取替えのきかない唯一無比のもの」である。近代国民国家は、特定のことばを国家語とすることで、「マイノリティ」と呼ばれる人々や旧植民地の人々からその取替えのきかない唯一無比の「母語」を奪った。そして現代では、失われた母語の救済・復権を目指す運動が盛んだ。例えば、ユネスコは「国際母語の日」（2月21日）を設け、失われる母語への保護を求めている。英国のバースに本拠を置く危機言語基金なども活発な取り組みをしている<sup>1</sup>。日本に於いては、アイヌの言葉・沖縄の方言を保護する呼びかけなどに見られる通り、失われる母語への保護が呼びかけられている<sup>2</sup>。「失われた母語」を保護・復活することによって異なった「ことば」を持つ人々を社会の中に取り組むという寛容で多様な「多文化主義」を達成するという自由主義（リベラリズム）の信条に基

<sup>1</sup> これは民間団体で、<http://www.ogmios.org> からアクセスすることができる。

<sup>2</sup> 例えば、1997年のアイヌ文化振興法がある。他にも、ICHEIL (International Clearing House of Endangered Languages) が東京大学に誕生した。また、以下の呼びかけなども参照されたい。“3千語が消滅の危機”「朝日新聞」2002年2月24日。

づいて<sup>3</sup>。

しかし、そもそも母語とは、このように分類可能で相対的な「かたまり」のようなものとして還元すべきものなのだろうか？トラウマの象徴として母語を取り戻すべき民族の証にするという政策・パースペクティブも必要だ。しかし、このような方法を通してのみで「ことば」を社会の中に取り込むことが、はたして多文化主義を達成するということになるのだろうか？<sup>4</sup> ここで私が問題にしたいのは、彼ら・彼女らの失われた「母語」それ自体よりも、それを復権することにより「多文化主義」を発効しようとするイデオロギーであり、そこで想定されている「母語」のあり方（praxis）についてである。なぜなら、そこでは「母語」に対する二重基準が存在しているからだ。「母語」は、近代国民国家統治の手段として批判の対象になる一方で、「マイノリティ」と呼ばれる人々の「母語」は保護する対象になるというものだ。この二つの「母語」は全く違うものだろうか？また、この二重基準を許容する「母語」のあり方とはどのようなものなのだろうか。そしてこの「母語」のあり方を通じて、はたして「マイノリティ」と呼ばれている人々の声を本当に聞くことができるのだろうか？そして、別の方法で「母語」を想起することはできないのであろうか？

李良枝という在日朝鮮人作家による小説「由熙」のテーマも母語であると言われている。「由熙」は、在日朝鮮人である主人公が、韓国に留学し、「母語」を失った彼女がその文化に順応できず、結局日本に帰国してしまうという話だ。この論文では、この作品が喚起する母語概念と多文化主義との関係を問題にしたい。なぜなら、このような「母語」は、再びイデオロギーの刻印をその身体の上に受け、「母語」と「国（家）語」との間にある不均衡で一方向的な関係を脱臼することができないからだ。しかも、このように推定される「母語」は、「失われた」母語を希求する人々の声を抹殺するという可能性も持っているからだ。この論文の目的は、この作品の喚起する「母語」概念を材料にして、母語に関する言説の中から、抵抗の場を確保することである。

<sup>3</sup> リベラルな「民族」観は、「民族」を分類可能な「かたまり」として見る傾向がある。その意味で、「民族」の起源を想定し、相対的な民族観を保持している。その結果、様々な「民族」間の問題を、リベラリズムが推定する「個人」観を援用し、自由を模索・折衷することで解決することを試みる。したがってリベラルな多文化主義に於いては、民族の分類はすでに推定され、そこで分類された民族間の問題を、寛容と正義の精神で解決しようとする。これがリベラルな多文化主義である。このリベラルな多文化主義を具現しているものとしては、例えば「日本人と多文化主義」石井&山内（東京：山川出版社、1999）などを参照されたい。また、「リベラル」という思想は、一枚岩ではない。（この点は、この論文の初期草稿の段階での日本コミュニケーション学会関東支部研究会での発表に於いて、神田外語大学の青沼智氏より指摘があった。青沼氏には適切なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表したい。）ウオーラーステインもまた、このリベラルという言葉・思想の混乱振りを指摘している。それは、「自由な市場を意味するのではなく、国家の不在を意味するのでもなく、もちろん民主主義でもなく」、「理性改良主義」であると彼は言う。それは個人の「主体性」を無条件に認めることで、「自由」をそこに与え、希望を与え続けてきたものである、ということができるだろう。ここですべてをまとめることは不可能だが、近代市民社会形成の中で共犯関係にあった「人間の主体化」を促すイデオロギーの一部であったことは間違いがないだろう。イマニュエル・ウオーラーステイン「混沌」とは何か」リベラリズムの苦悶」京都精華大学編（京都：阿吽社、1994）、85-86。この意味でのリベラリズムと近代市民社会的多文化主義とのリンクに関しては、以下の文献を参照されたい。ウィル・キムリッカ「多文化時代の市民権：マイノリティの権利と自由主義」角田他訳（京都：晃洋書房、1998）。

<sup>4</sup> 1999年に日仏開館で行われた国際シンポジウム「言語帝国主義の過去と現在」において、ルイ＝カルヴェとイ・ヨンスクの対立もこの母語概念の問題に集約されるだろう。一方は、「すべての少数言語に言語権を認めよ」というのに対して、もう一方は「それを単なるポリティカルコレクトネスである」と退け「媒介言語の役割を強化する」ことの重要性を説く。どちらの考え方も、母語は分類可能な相対的なものであるという前提を持つ。しかし、その前提ゆえに、母語を守るか守らないかという問題にすり変わってしまったのが残念だ。母語を分類可能な相対的なものとして捉える考え方そのものが帝国主義的であるとの指摘はここではなかったようだ。このシンポジウムで発表された論文に関しては、次の文献を参照されたい。「言語帝国主義とは何か」三浦信孝&糟谷啓介（東京：藤原書店、2000）。

## I

母語とは、分類可能な相対化される「ことば」であり、民族・文化には、それぞれ違った独特の「ことば」がある、という考え方の一つでもある。田中は、ことばに付与された「政治的威信を骨抜き」にし、母語を救済することを試みた<sup>5</sup>。したがって、この論理に従えば、母語は常に民族の出自の証明を与える資格を持つものである。

この論文で言及する「由熙」に寄せられた多くの評も、この作品がこの「母語」をテーマにしたものであることを確認している。例えば、富岡と秋山は、「由熙」は「母語と自国語と外国語のきしみ」を表現することで「自分の生存の根の不確かさを洗い出す」小説であるとそれぞれ述べている<sup>6</sup>。中上は、「由熙」の中で「問われているのは、母語（母国語ではない）であり、母語と絡みついた感性である」と言う<sup>7</sup>。川村は、その母語と日本語の間で、主人公の由熙は「自分が何者であるのかを必死に探りあてようとした」と言う<sup>8</sup>。つまり「失われた母語」を探ることにより、主人公が「マイノリティ」としての自己同一性を求めたという解釈である。そして、中上は、李良枝を「失われた母語」を捜し求める「マイノリティ」の作家と位置付けたのであった<sup>9</sup>。

「母語」が、「民族」・「マイノリティ」の出自を示す拠り所であるとするならば、彼ら・彼女らの生は常に失われたものを拠り所にしているということになるだろう。よって、「由熙」はまさにこの失ったものを基盤にすることによって生まれる閉塞感を表現しようとしている、ということになる。「在日」である主人公由熙が、自らのアイデンティティの基盤を求めて韓国に留学したが、韓国社会は彼女が思い焦がれていたようなものではなかった。由熙は、バス内のラジオの音が気になって気分が悪くなるほど韓国文化に嫌気がさしていたし、雑踏の中で聞こえてくるハングルの音に神経が参ったりもする。しかも韓国でもっとも有名な大学の国文科に所属しながらも、由熙の「ことば」の能力は周りの人にうまくやっていけるかどうかという疑問を抱かせる程度のものであった。どんなに母語<sup>ウリマル</sup>を手にしようと恋焦がれても、それを手にすることはできなかったのだ。したがって、「由熙」のテーマが「失われた母語」である限り、由熙のアイデンティティは「無いもの」に依存していることになるだろう。

ここで想起される彼女が求める「母語」は、完全なかたちを備えた「ことば」である。由熙が失ってしまった母語<sup>ウリマル</sup>に恋焦がれ、それを獲得できなかったという物語のモチーフは、彼女が求めた「母語」が完全な「ことば」としての母語を推定しているからである。

母語について考える際に鍵になるのは、舌の「ありよう」である。母語を話す舌はもつれることなく一つの「ことば」を話すことができることが推定されている。舌がもつれるとき、その「もつれ」は、否定され修正されることになるだろう。滑らかに、そしてよどみなく話しをするためには、舌が

<sup>5</sup> 田中克彦「ことばと国家」（東京：岩波、1981）、24

<sup>6</sup> 富岡多恵子「母語と自国語と外国語：韓国舞台に「きしみ」」「朝日新聞夕刊」1988年10月24日、11；秋山駿「生の源泉を問う若き作家たちの輝かしき出発」「週間朝日」1989年3月24日、125。

<sup>7</sup> 中上健次「文芸時評」『ダ・カーポ』1988年16号、110。

<sup>8</sup> 川村湊「新しい『在日の光景』」「週間読書人」1992年6月8日1937号、8；この作品が、母語をテーマとしていることを確認している批評は多くある。以下を参照されたい。歌田久彦「李良枝論」「女性作家の新流・国文学解釈と鑑賞別冊」1992年5月、82-89。また、岡野は「由熙」を、韓国の父系社会における辺境化された女性への抑圧された声を聞く場所とし、この小説を「マイノリティ」の作品として位置付ける。以下の文献を参照。岡野幸江「『言葉』への懷疑—李良枝『由熙』の世界」「社会文学」日本社会文学会 1997年11号、83-92。

<sup>9</sup> 中上健次「文芸時評」『ダ・カーポ』1989年15号、47。

「もつれる」ということは障害であると考えられるからである。母語は「母から乳を吸うごとく獲得した」はずのものであるからだ。この母から受け継ぐものが「ことばの身体」であり母語であると考えられている。母から「乳を吸う」ように「ことば」を獲得するために、子供はそれをあたかも肉体的に相続する、と考えられているためである。母語は、この身体性をすでに獲得した「ことば」として考えられているために、母語と「ことばの身体」は同一のものであると考えられている。例えば、イ・ヨンスクは、「ことばの身体」とは、書き言葉の洗礼を受ける以前のものであり、生活世界に密着した、まさに国民国家の力の及ばない「声」の領域に存在していることばの基幹のようなものであることを指摘している<sup>10</sup>。したがって、母語とは、国民国家と対極にある、私的な生活世界と密着した自己の同一性（アイデンティティ）を確認することができるものとして考えられているのである。したがって、「失われた母語」を思い出すことは、（国民国家と対極にあると考えられている）「民族」・「マイノリティ」の出自の問題として文化政治的な合法性を得るということになるのだ。

しかし、母語が「ことばの身体」と同一のものであると仮定しても、由熙にとっての母語は、この「ことばの身体」にはない。彼女は、自らの日本語人としてのアイデンティティに閉塞感を感じることを通してのみ、彼女の「母語」<sup>ウリマル</sup>を想い続けることが出来るのだ。李良枝などの「在日」作家にとって、「ことば」と「アイデンティティ」の生むこの「ずれ」は閉塞感溢れるものとして表現される。この「ずれ」からアイデンティティが生まれる状況こそが「在日」を条件付けるものである。金石範は以下のように述べている。

（日本語は）自分を取り巻く生活現象であり、自分の生活の家庭を支配し内部に浸透した、一般に日本人が日本語を意識しないのと同じように、ほとんど意識されない空気のごときものだ。しかし、これは自分の母国語でない以上、いつかは意識化、客観化されねばならないのであり、苦しいことだがそれは民族的自覚とともにやってくる<sup>11</sup>。

日本語を話す彼女の舌がなめらかにすべればすべるほど、その舌は母語<sup>ウリマル</sup>を求める、という舌の「もつれ」が起こっているのだ。舌がなめらかであればあるほど、逆にその流暢さの中に舌の「もつれ」を含有しているのだ。つまり、彼女の母語は、この滑らかさの産む「もつれ」から母語<sup>ウリマル</sup>を求める可能性を生み出していると言うことができる。したがって、彼女の生は、「失われた完全な身体を持つ母語」に拠り所があるのではなく、この「もつれ」にあるのである。

ここで矛盾が起きる。「由熙」という作品は、失われた母語を思い出すことによって「もつれ」のない母語を推定している作品であると合意されているにも関わらず、作品の中で語られている母語は、

<sup>10</sup> イ・ヨンスク、「言語という装置。」「越境する知4 装置：壊し築く」（東京：東京大学出版会、1999）、225－241。

<sup>11</sup> 金石範「在日朝鮮文学」「岩波講座 文学8 表現の方法5—新しい世界の文学」（東京：岩波、1976）、285。ここで注意を喚起したいのは、金石範と李良枝は同じ世代の作家ではないということである。ここで引用した文章からも分かるように、金は民族を強く意識した「在日」文学を追及した世代に属すだろう。一方で、李良枝は新しい世代に属し、「民族色」よりは「個」を描く作家として評価される。例えば、顧偉良「越境する文学：方法としての由熙」「国際日本文学研究集会会議録」国文学資料館、81－98を参照されたい。「在日」作家として彼ら・彼女らを同じジャンルに入れてしまうことによって、「在日」を凡庸な記号に貶める帰結にも注意を払うべきであろう。民族か同化か、北か南か、といった日本社会が「在日」に提示するものには還元されない存在であることを、歴史的に位置付けることでのみ「在日」の歴史性・非還元性を記すことができるだろう。この点に関しては、竹田青嗣「沈みゆくものの光景」「在日」という根拠（東京：ちくま学芸文庫、1995）、250－268に詳しい。

「もつれている」のである。これは、この論文の最初に記した母語の二重基準と似た問題に戻る。母語は、一方では完全なもので、もう一方では不完全なもの、なのだ。この矛盾している母語のあり方とは、いったいどのようなものなのだろうか？そして、「ことばの身体」は本当に恋焦がれたあの完全な「ことばの身体」を持つものだったのであろうか？また、すでに存在しない「母語」をそういうものとして推定・想起することは、いったい「ことば」と母語との関係をどのように変えるのだろうか？そして、それは「私たち」（近代国民国家「日本」への帰属意識を問題なく考えることができる人々）とはどのような関係を結ぶのだろうか？

## II

この作品「由熙」の中では、この「もつれ」が、ある特定の形で現れ、「母語」概念を喚起する。これは、由熙の帰国後、彼女の部屋でオンニ（韓国で彼女を下宿させた人物）が由熙を思い出し、彼女への愛着を示し始めるくだりに良く現れている。あらゆる面で韓国社会になじもうとしてもなじむことが出来なかった由熙のことを、オンニは苦々しく思う。韓国の有名大学国文科に籍を置きながら、彼女の話し言葉は拙かったため、学業の成功も疑わしくオンニには思えてくる。私生活においても、由熙は日本語の本ばかり読みふけり、韓国の文化に積極的になじもうとする意思さえ見られなかった。その一方で、オンニは由熙への愛着を示し始める。原稿用紙にぎっしり書きためた由熙の日本語の文章を理解することが出来ないにも関わらず、まるで由熙がその存在を訴えかけているようにオンニには見えてきてしまうのである。

文字には表情があった。

日付はなく、ところどころ一行か二行空けられて書き綴られていたが、表情の変化がその時々  
の由熙自身の心の動きを想像させるように、鮮やかだった。ある部分やある文字は泣きながら書  
いているのではないかと思わせ、ある箇所やある文字は、あせり、怒りもし、また由熙が時折見  
せていた幼児のような表情や、甘えた声を感じさせるところもあった。

…

文字の表情は刻まれ、焼きつき、その音たちが記憶の中の声となって、今にも小さな塊りを動かし始めるようだった。

—— あ、い、う、え、お。

この音は知っていた。あ、い、う、え、お、と私は呟き、それらの音を由熙に呟かせてみた。由熙は文字となり、その形、その癖に現れて私に呟き返してきた<sup>12</sup>

こうして由熙の書いたものを眺めて彼女を思い出すうちに、オンニは由熙と会話する。そしてこの作品のクライマックスとして由熙がオンニの声帯を通じて声を挙げようとする描写がある。オンニが由熙を思い出し、彼女の声帯を通じて由熙の声が出現しようとするまさにその瞬間が以下のくだりである。

（由熙は）この国にはもういない。どこにもいない…。胸の中に自分の呟きが浸み渡っていった。

<sup>12</sup> 李良枝「由熙」「李良枝全集」（東京：講談社、1993）、425。



小さな塊りがかすかに慄えた。

小さな痺れを、足先に、手に、胸に、全身に覚え始めた。吐息がその痺れでゆがみ、息が乱れた。うしろに向きかえり、階段の前に立った。足許がはっきりとせず、重心がとれなくなったようにふらついた。

小さな塊りがぐらりと動いて弾け、由熙の顔が浮かんだ。

—— 아

私はゆっくりと瞬きし、呟いた。

由熙の文字が現れた。由熙の日本語の文字に重なり、由熙が書いたハングルの文字も浮かび上がった。

...

次が続かなかった。

...

音を探し、音を声にしようとしている自分の喉が、うごめく針の束に突つかれて燃え上がっていた。<sup>13</sup>

オンニの口をついて出てくる「아」<sup>ア</sup>という音は、「ことば」としての輪郭を持つことができない。輪郭を未だ持ちえていないが、オンニの由熙へ向けた愛着から生まれるこの由熙の声は、まさしく彼女の声聞くことが出来る瞬間である。輪郭を得ていない、という意味でオンニの舌に亀裂、「もつれ」を生んだ瞬間ということも出来るだろう。

このオンニの舌の「もつれ」の中に由熙の声聞く、という解釈に異論はないように思う。オンニからの愛着が由熙へ向けられるまさにその瞬間に「もつれた舌」を表す象徴的な由熙の声が現われる。<sup>ウリマル</sup>母語を求めたが、挫折してしまった由熙。<sup>ウリマル</sup>母語が獲得不可能なものであったことに気が付き悲嘆にくれる由熙。彼女を、一方的に凶弾することなく、文字にまで愛着を示してくれたオンニ。オンニは、由熙の置かれた状況に対して深い理解と愛着を示すことを試み、途方にくれた彼女の心を抱きしめる。そして由熙の声がここで産まれるのである。

このオンニの由熙へ向けた理解と愛着に関して、この描写が過剰すぎると批判しているものもある。それほど、この彼女の独白を通じた由熙の描写は行き過ぎでさえある。この過剰は、由熙が何を思い、何を考えていたのかまったく分からなかったことに起因する。オンニにしても、そして読者にしても、由熙の本当の声は、実は聞こえなかったのだ。読者は、オンニの独白を通してのみ由熙の心の状態を垣間見ることが出来るのだ。つまり、それはオンニの独白を通じた由熙の声でしかない、ということなのだ。言い換えれば、オンニが由熙へ向けて示した愛着を通してしか、由熙の母語<sup>ウリマル</sup>への執着・愛着を理解することができないのだ。

したがって、オンニの由熙への愛着は、読者が由熙へと向ける愛着と重なることになる。この場面は、読者が由熙の置かれた「ことば」に関する状況に、愛着を示す瞬間である。つまり、その愛着はオンニから読者へ転移したものとして読むことが必要である<sup>14</sup>。読者は、この描写を通して母語の大

<sup>13</sup> 「同上」450.

<sup>14</sup> 「転移」はもちろんジャック＝ラカンの所謂「セミナー11」からの応用であるが、転移と愛着の関連に関しては以下の文献が詳しい。Pierre-Gilles Gueguen. "Transference as Deception." *Reading Seminar XI: Lacan's Four Fundamental Concepts of Psychoanalysis*. Eds. Richard Feldstein et al. (Albany: State University of New York Press, 1995): 77-90.

切さを考え、相対的な母語の重要性を認識するからだ。それは、『由熙の求めた母語<sup>ウリマル</sup>は、「ことばの杖」のような「ことばの身体」であり、それを大切にしなければならない。それは唯一無比のものであるから』という母語に対する倫理観を育み、母語とことばの身体の同一性を問題のないものとして認めさせるのだ。これは、「由熙」が失われた母語に関する物語である、という多くの評からも確認することができるだろう。

この作品の中で、「失われた母語」について思いを馳せることは、その母語を「思い出す」ということである。もちろん、「由熙」は母語の「記憶に関する物語だ」という評も存在する<sup>15</sup>。しかし、母語を「そういうもの」として「思い出す」批評は暴力的だ。そこでは、失われた母語を自らの出自の基盤とする「マイノリティ」としてしか、彼女は生き続けることができなくなるからだ<sup>16</sup>。「母語＝ことばの身体」という図式を維持する限り、「もつれた舌」と「もつれていない舌」との差を考え、「もつれていない舌」を持つものが、「もつれた舌」に倫理的な責任を負い、「もつれた舌」が再び母語に出会うことを願う、という結論に達するのみであろう。その批評は、母語に遠い人と、既に獲得している人がいることを追認するにとどまり、既に獲得した人が、まだ獲得していない人に向かって寛容の情を示すというリベラルな倫理を生み出す。それは、「民族」か「同化」なのかという古典的な二項対立の中に「在日」を再び押し戻すことになるのである。これは、リベラル社会に於ける「マイノリティ」と「マジョリティ」という対一配置を再生産し、リベラルイデオロギーのエトスを照らすことになる。母語礼賛には、必然的に失われた母語の復権を唱える正義（リベラル）の魂が宿っているのだ。彼女の母語は、舌の「もつれ」の中から産まれている訳だが、その「もつれ」を「もつれることのない母語<sup>ウリマル</sup>」の「ことばの身体」に戻すことは、再び彼女の母語を求める舌を奪うことになるだろう。母語とはよどみなく流暢な、そして分類することのできる「ことばの身体<sup>ウリマル</sup>」を持つもの、つまり相対化されうる母語として思い出すことは、彼女の母語を求める舌の「もつれ」を暴力的に抹消することになるのである。母語を身体的本質を持ったものとして考えている限り、私たちはせいぜい分類可能で相対的な母語しか思いつかないであろう。相対化された「もつれない舌」を想起することは、この舌の「もつれ」を無視するという意味で暴力的なのだ。ここで求められている実践（praxis）は、彼女の「もつれ」を奪うことなく、しかもその「もつれ」を相対的な母語に還元することなく、彼女の「母語<sup>ウリマル</sup>」を希求する声を保持し続けることである。つまり、「私たち」の間で広く合意され、制度として成立している「母語＝ことばの身体」という図式を脱臼することが求められているのだ<sup>17</sup>。

「ことばの身体」と母語<sup>ウリマル</sup>が同一のものでないならば、いったいそれらはそれぞれどこにあるものなのだろう？ また、どのようにしたらこの「もつれ」を「私たち」の「もつれ」として、母語を思い出すことができるようになるのだろうか？ この「もつれ」を「私たち」の一部として考えることが出来るときにはじめて、多文化社会への扉を開くことができると私は考える<sup>18</sup>。

<sup>15</sup> 木崎さと子「「母語」への問いかけと祈り」「群像」1989年4月号、44巻4号、290－291。

<sup>16</sup> 木崎「前出」、291。

<sup>17</sup> 母語概念の脱臼に関しては、以下の文献を参照。酒井直樹「序論—ナショナリティと母（国）語の政治」「ナショナリティの脱構築」酒井直樹その他編（東京：柏書房、1996）、9－53；母語化するクレオールを脱臼する試みに関しては、以下の文献を参照。西谷修「〈クレオール〉の争奪」「マイノリティは創造する」宇野邦一・野谷文昭編（東京：せりか書房、2001）、37－50。

<sup>18</sup> 尹健次「在日を考える」（東京：平凡社、2001）、343。

### III

先にも述べたように、この由熙の声がオンニの喉をついてまさに出現しようとする瞬間は、読者にとって「失われた母語」への愛着を喚起させられる場所である。「母語」は、読者がオンニと共に、由熙へと向ける愛着から生まれる「母語」である。この転移の結果、読者は母語に対して愛着を示し、母語を「そういうもの」として想起するに至ったと言うことが出来るだろう。民族の出自を示す起源として考えられている「母語」が、〈読者の由熙へと向ける愛着の結果生み出された「母語」〉という新たな意味を背負ったのだ。つまり、「起源」と「効果（結果）」という全く相反する意味を担わされた「母語」は、この矛盾が産む亀裂を内部に抱えることになる<sup>19</sup>。

この亀裂は舌の「もつれ」を生み出すため、「もつれない母語」を不可能にする。それは愛を求め続ける舌の上にぽっかりと生まれた穴のようなものだ、と言うことができるのかもしれない。由熙にとってその穴は埋めることができないものであるし、オンニにも埋めることができない。そして私が強調したいことは、読者にとってもその穴は生めることが出来ないということである。愛を求める舌は、永遠にそこに穴を保持し続けなくてはならない。この穴が由熙の舌をもつれさせ、オンニの舌をもつれさせ、そして、読者が記憶として想起する純粋な「母語」概念にさえ「もつれ」を生じさせるものだ。その結果生まれた「母語」は、内部に亀裂という差異が生まれる場所を含む。そのために、リベラルな倫理観を産む「完全な母語」になることができない。むしろそれは、その倫理観を産む主体を脱臼し、それ自体さえも脱臼してしまう可能性を持ったものである。もし、「失われた母語」を「そういうもの」として復権することがリベラルな多文化主義の基盤であるとしたなら、舌に亀裂を生むこの「もつれ」は、リベラルなイデオロギーに杭を打つことが出来る。なぜなら、愛着を寄せる対象である「母語」は、オンニの由熙への愛着を通じ、読者の由熙への執着をも喚起することができるという意味で、オンニにとっては由熙を思い出す場所であり、読者にとっては「失われた母語」を「そういうもの」として、思い出す場所なのである。その結果、内に亀裂を内包するが故に「母語」の完成を不可能にし、未だその意味的な輪郭を帯びていない「母語」を将来へ向かって生き延びさせる。その母語を思い出す「記憶の場所」は、「母語」の可能性が永遠に将来に向かって開かれた場所であるからだ<sup>20</sup>。

この小説の読者への転移を批評空間に引き出した評はなかった。どちらかというところ、「由熙」が作品として読者と結ぼうとするこの関係を否定するものであった。例えば、竹田青嗣は、オンニの「異様とも思えるほどの“理解”」が「大変に奇妙なもの、あるいは物分りがよすぎる」ために、「由熙」には「他者の視線に訴えて預けてしまうよう弱さ」が観察され、それが「ある種の甘え」に通じる、と手厳しい発言をしている<sup>21</sup>。この作品が読者と結ぼうとしている関係を「甘え」として退けるのだ。そして、作品の読者へと働きかける文化政治的なレトリカルな力を、「個人」ということばの中に閉じ込めることで否認する<sup>22</sup>。

<sup>19</sup> 効果としての主体と、起源としての主体の二律背反性が産むアイデンティティに関しては、以下の文献を参照。酒井直紀「過去の声—十八世紀日本の言説における言語の地位—」（東京：以文社、2002）。

<sup>20</sup> この論文では、作品の読者への転移の問題を、「母語の記憶」として見ている。この論文の理論的な背景に関する文献は以下を参照されたい。Pierre Nora. “Between Memory and History: *Les Lieux de Memoire*.” *Representations*. 26 (1989) : 7-25; Jacques Derrida. *Monolingualism of the Other or the Prosthesis of Origin*. (Stanford: Stanford University Press, 1998).

<sup>21</sup> 竹田青嗣 “理解されぬものの“不幸”」「週間読書人」1989年3月20日、1775号、1。



この帰結は、作品解釈という近代文学の推定する「読み」の方法から生まれる<sup>23</sup>。なぜなら、それはオンニの由熙への愛着が読者へと転移する軌跡を、作品解釈という名の下に抹消してしまうからである。「母語」やその核である「ことばの杖」に関する解釈を作品内で完結させてしまうことは、そのことばの持つレトリカルな力をそこに封じ込めてしまうことになるだろう。佐藤秀明は、『「ことばの杖」を失ったのは、オンニであり、しかしオンニが由熙への愛着を示したときに始めて「遠かった」由熙が、はじめてオンニの体に届いた瞬間なのである』と述べている<sup>24</sup>。この「読み」は、由熙の声がオンニに届くさまを解釈するに留まり、転移を作品内に閉じ込めている。金克美も、由熙は「自分を受け入れてくれる場所」を「見つけられた」と解釈する<sup>25</sup>。つまり、由熙の声はオンニへしか届かないのである。また、このテーマを李良枝個人の問題に帰すことも、リベラルな土壌に「母語」を還元することになるだろう。「母語の欠落」を、「私たち」の問題ではなく、それぞれの「個」の問題として扱うからである。同様に、彼女個人の「書く」という創作能力に「在日」のテーマを帰す批評も、読者への転移の軌跡を、彼女個人の人生の中に差し戻すことに留まり、ここで私が示す「母語」の転移の問題を顕在化することができないであろう<sup>26</sup>。例えば、佐藤は、「由熙」を以下のように解釈する。「李良枝は未だ身体化されない言語を通さず、直接個としての身体を韓国文化の中に投げ入れ、それを体現しようとしたのである。」<sup>27</sup> つまり、母語にまつわる問題は、作者個人のものとして考え、「私たち」に関わるものではないのだ。

母語の身体性とは、相対化されるそれぞれのことばの起源にあるものではない。イのように、声の文化を本質的な「ことばの身体」として想起し「思い出す」ことだけでは不十分だ。むしろ、母語の身体性は、愛着を受ける「対象 (*objet a*)」として、公的空間に表出した「母語」をその内部から差異化していくものとして考えるべきだ<sup>28</sup>。そこで表出した「母語」は、自らを差異化する愛着の対象を内に保持し、それ自身がまさに生まれようとする臨界点 (*crisis*) なのだ。「母語」は、相対化された身体ではなく、過去に遡るべき起源でもなく、臨界点そのもののものだ。

#### IV

「私たち」は自分の舌の「もつれ」を認識することによって始めて自らの母語への愛着を認識することができる。「私たち」がその「もつれ」を元に戻そうとして母語を「そういうもの」として思い

<sup>22</sup> 同様に、黒古一夫の李良枝批判も手厳しい。「帰すべきものを持たない〈異邦人〉」としてのコミットメントに欠け、「個人」であることにエネルギーを傾けたとして、彼は彼女を批判する。黒古一夫「在日朝鮮人文学の現在：〈在日する〉ことの意味」『民濤』1987冬：86-97。

<sup>23</sup> 近代文学が推定する読みのプロトコルへの批判に関しては、以下の文献を参照。西谷修「世界史の臨界」（東京：岩波書店、2000）。

<sup>24</sup> 佐藤秀明「ソウルの在日韓国人—李良枝と「由熙」の場合」『昭和文学研究』1993年7月、43。

<sup>25</sup> 金「前出」、154。

<sup>26</sup> 顧偉良は、文学は作家との関係の特権化するものという前提に基づき、ここで私が取り上げているテーマを李良枝自身の問題に帰す。顧は、「彼女のにとってその問題は、終わりのなきエクリチュールの営偽であろう」と言う（70）。顧は、ポストコロニアル的な「マイナー文学」として彼女の作品を考えているにもかかわらず、ここでのテーマを「私たち」の問題ではなく、彼女自身の問題として位置付けている。この批評は、不可解であると言わざるを得ない。顧偉良、「想像の世界、小説への道：乱舞するナビ・李良枝」『弘前学院大学紀要』1999（35）：55-72。マイナー文学として在日文学を読む可能性の地平を開く文献は、以下を参照されたい。

“座談会：在日文学と日本文学をめぐる”『民濤』1988秋、12-60。

<sup>27</sup> 佐藤「前出」、40。

<sup>28</sup> Robert J. C. Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture and Race*. (London: Routledge, 1995).

出すことが、いかに彼女の母語<sup>ウリマル</sup>を思い出す行為と交錯（転移）しているのかを考えていくことが求められている実践である。彼女の「舌のもつれ」は、「私たち」が母語に愛着を寄せる際に「マイノリティ」のものとして一度は辺境化されるかもしれないが、その「舌のもつれ」があって初めて、「私たち」は母語を完全な身体として求めることが出来るのである。言い換れば、「もつれ」は、母語の前提であり、そしてそれは「私たち」が愛着を寄せ、母語を思い出す「母語以前」の「ことばの身体」なのである<sup>29</sup>。彼女の母を求める舌の「もつれ」が、「私たち」が矯正しようとするまさにその「もつれ」であることを提示することができれば、批評実践としてそれは効果を発揮する。「ウリマル」は、愛着を向ける「対象」として母語よりも先に存在していたその身体であり、これからも産出されてゆくであろう本来的な母語を内から脱臼することができる大切な「ことばの身体」なのだ。たとえウリマルがリベラルな多文化主義に「マイノリティのことば」として一度取り込まれても、この「ことばの身体」を抵抗の場として確保することが大事である<sup>30</sup>。

「ことばの身体」は、由熙を母語<sup>ウリマル</sup>にあこがれ続けさせ、そして絶望させ、それでもまだ、彼女の母語<sup>ウリマル</sup>への欲望を喚起し続ける（実際に彼女は、テグム《横笛》に母語<sup>ウリマル</sup>を求めることになる）。そして、それは、「私たち」が純粋な「失われた母語」として保存したい愛着を向ける対象としてのものでもある。つまり、「ことばの身体」は、「私たち」が「失われた母語」を思い出すことを通じて再構築しようとするリベラルなアイデンティティを、その内から脱臼し続けることができる抵抗の場であり、「母語」そのものなのである。

<sup>29</sup> 「母語以前の母語」という戦略は、以下の文献の「人種主義以前の人種」から援用した。Gayatri Chakravorty Spivak. "Race Before Racism: The Disappearance of the American." *Boundary 2*. 25 (1998): 35-53.

<sup>30</sup> 「抵抗の場」の確保に関する言説戦略の例は、以下を参照。Barbara Biesecker. "Coming to Terms with Recent Attempt to Write Women into the History of Rhetoric." *Philosophy and Rhetoric*. 25 (1992): 140-161.